

(20) フ キ

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (ButMV、 CMV)	①ウイルスに感染していない種茎を用いる。 ②施設の開口部に防虫ネットを張り、媒介虫であるアブラムシの侵入を防ぐ。 ③テントウムシやヒラタアブなどの捕食性天敵の発生が多いときには、殺虫剤の散布は控える。 【参考事項】 病原ウイルスはアブラムシ類によって伝搬される。アブラムシ類は出芽期に発生が多い。
半身萎凋病 (<i>Verticillium</i>)	①無病株を選んで発病のおそれのないほ場で栽培する。 ②連作を避ける。水田との輪作は発病抑制に効果がある。 ③夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 ④被害株、被害茎葉は除去して、適切に処分する。 ⑤窒素過多にならないようにするとともに、カリ質肥料をやや多く施用する。 ⑥種茎掘上げ後の水洗は、流水中で行う。 【参考事項】 本病菌はナス、イチゴ、トマト、ハクサイ、ダイコン、カブ、オクラ、ウド、キクなどを侵す（ただし、寄生性の分化あり）。 地温が20～25℃で最もよく発生する。 罹病茎葉内で微小菌核が形成され、これが土壌中に長期間残存する。
白絹病 (<i>Sclerotium</i>)	①夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 ②発病株を早期に発見し除去する。 ③種茎は健全親株から採取する。 ④窒素肥料の過用を避ける。 ⑤密植を避け、株元が過湿にならないようにする。 【参考事項】 3月下旬～10月にかけての高温多湿になる環境条件下で発生が多くなる。 発病適温は15～35℃である。 主に、土壌伝染、種茎伝染する。
葉枯病 (<i>Stagonospora</i>)	①窒素過多を避ける。 ②施設栽培では多湿にならないように注意する。 ③株養成期間中に多発した株は苗として用いない。 【参考事項】 病斑部に形成された柄子殻で越冬し、分生子により空気伝染する。
さび病 (<i>Coletosporium</i> , <i>Puccinia</i>)	①発生初期に被害茎葉を除去する。 ②施設栽培では多湿にならないように注意する
コナジラミ類	①ほ場周辺の雑草を除去し、飛来源、増殖源とならないようにする。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 【参考事項】 オンシツコナジラミとタバココナジラミが寄生するが、タバココナジラミの発生が多い。特にタバココナジラミが寄生すると、白化症の原因となる。  タバココナジラミ成虫（左）、幼虫（右）
フキノメイガ	①被害茎を早めに刈り取って適切に処分する。 ②施設内への侵入防止のため、防虫ネットを張る。 【参考事項】 幼虫が地下茎に食入すると防除が困難になる。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
ハスモンヨトウ	①ほ場周辺を除草する。 ②卵塊や幼虫は発見しだい捕殺する。 【参考事項】 アブラナ科、ナス科、キク科など多くの植物を食害し、施設外から成虫が飛来するので注意する。卵からふ化したばかりの幼虫は集団で葉を食害するため、葉は白色に透けたような被害となる。 ハスモンヨトウ卵塊（左）、若齢幼虫（右）
センチュウ類（ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ）	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタリア スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールドなどが有効 ②太陽熱消毒を行う（土壌病害虫の防除法の項参照）。 ③有機物を施用する。 【参考事項】 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。